解題

戸暁輝
民俗学：批判的視点から現象学のまなざしへ
―バウジンガー著『科学技術世界のなかの民俗文化』訳者あとがき―

NISHIMURA Mashiba
西 村 真志葉

本稿は、戸暁輝『民俗学：従批判的視角到現象学的目光』の和訳である。原型となる同名の論文は2013年『安徽大学学報』第3期に発表され、翌2014年、加筆修正を経たのち、ヘルマン・バウジンガー『科学技術のなかの民俗文化』の中国語版に改めて「訳者あとがき」として再収録された。

戸氏がはじめて訳書を出版したのは2003年、アメリカ人美学者、人類学者エレン・ディサーナーヤカの『Homo Aestheticus. Where Art Comes From and Why』がその処女作だった。ただそれ以前にも、1987年のジョナサン・カラーを皮切りに、ロラン・バルトの文学理論からレヴィ＝ストロースの神話研究、ジャック・ラカンの哲学講義録、ダニエル・J・ブーアスティンの大衆文化研究、ビビアン・ゴーニックのフェミニズム研究などに至るまで幅広い分野の論文を訳しており、部分訳を含めるとその発表数は30本以上にものぼっていた。そのうち、民俗学からはアラン・ダンデス『The Piropo and the Dual Image of Women in the Spanish-Speaking World』の訳稿があるのみである。戸暁輝という名は、長く民俗学者にはなじみの薄いものだった。

戸氏は陝西師範大学と山東大学でそれぞれ文学と美学・文芸学を専攻し、『中国人の審美的心理の発生学研究』で博士学位を取得したのち、美学者、文学理論家として研究者のスタートを切った。その研究者としての道程は決して平坦なものではなく、地方在住というハンディキャップに加え、途中行政機関での勤務も経験した。早熟な才能に恵まれ民俗学者としてエリート街道を歩んできた高丙中氏とは対照的に、不遇の時代を知る遅咲きの民俗学者だといえよう。

戸氏は構造主義・ポスト構造主義の文学理論と人類学研究、そして原始芸術への文化史的・心理学的関心に導かれるように、文学と文化、初原性と現代性の狭間に位置付けられる口承文芸へ歩み寄って行く。そして、中国社会科学院民間文学研究室に就職後は、文字どおり一から民俗学・口承文芸を学びながら、2001年より『民間文学理論と方法の超域文化的ダイアログ―アラン・ダンデスをケースに―』の執筆に着手する。のちに『現代性と民間文学』という名で刊行された本研究は、民俗学における「民」という概念に現象学的還元を行い、民が民俗学のディスコースの体系において生成される想像上の集団であり、現実の集団とは直接的、必然的な関係はない、つまりこの複雑なシニフィアンについてどのようなシニフィエが与えられようと、現実に生きる人々とイコールではないことを論証したものである。浪漫主義やナショナリズムを背景にした地方文化のレトリックの策略により、民俗学の見つめる研究対象が「どこか別の場所に生活している」現状への警鐘を鳴らす戸氏の研究は高い評価を得たが、戸氏自身は自身の「転換」のきっかけになったにすぎない、と冷静だった。民俗学の分野におけるこの

処女作が、戸氏に自らの過去の研究への不満を募らせ、哲学の素養とドイツ語能力の不足を痛感させていたためである。

そして『現代性と民間文学』の刊行と前後して、戸氏は長い「隠居」生活に入る。彼は2003年から中国社会科学院哲学研究所の院生たちに交じって純粋哲学を基礎から学んだ。同時に独学でドイツ語学習も始め、2005年からは本格的にドイツ語の講義を受講した。一切の物欲を絶ち、社会科学院へ通い詰める戸氏は、まるで「修行僧」のようだと揶揄されることもあったが、中国社会科学院の学問至高主義的な雰囲気、週一日勤務という勤務体制、そして民間文学研究室長呂微氏の理解は、戸氏を育て、守り続けた。

その成果は、2008年脱稿、2010年出版の『愛と自由の生活世界への回帰―純粋民間文学のキーワードをめぐる哲学的解釈―』として世に送り出されることになる。本書も前作と同様、民をはじめとする民俗学の基本概念に現象学的還元を試みた作品だが、その決定的な違いは認識論から存在論への転換、つまりこれらを認識論的な論理性概念ではなく、存在論的な描写性概念として捉え直した点にあった。これは、民俗学者が民俗事象とは何かを判断し、主体としての民を「…とは…である」という功利的な関係に引きずり込んでその自由を喪失させるのではなく、あくまで自由な存在として民俗事象を存在させ、表現する主体と出会い、彼らを感受し、描く、そしてその存在は民俗学者に見せてくれる姿よりもつねに多様であることを意識する、という立場である。戸氏は、民俗学者がどのように定義しようとも、第一義的な民とは可能性と自由の地平を有し、生活世界に生きる人間であり、こうした民を研究する民俗学の起源にあるのが、絶対的平等の法則から生ずる愛と絶対意識に属する無（Nichts）としての自由、つまり人間を人間たらしめる存在の根源であり、この愛と自由の絶対法則により構成される生活世界なのだと考えた。そして、民俗学が目指すべきは完成形ではなく、この論理的な起源へ絶えず立ち返り、可能性の地平を探すことだと主張した。一般的な認識のかたちを放棄し、主体自身に生活世界の地平を残し続ける民俗学研究には終わりがない。つまり、感受と描写を通じて「愛と自由の生活世界へ向かう永遠の旅」に出るのであり、その結果として、民俗学は永遠の価値と意義を獲得するのである。

本書はあまり類を見ない民俗学の哲学研究であり、一般的な民俗学研究とは一線を画している。だが、民俗学が成立しうる基盤を根源的に問い、概念をめぐる不毛な認識論的論争に終止符を打った功績は計り知れず、民俗学に存続の道を示したという意味でも、他の民俗学研究に勝るとも劣らない民俗学的価値を有している。本書のあとがきに、戸氏は「この5年間にひとつの悔いも残っていない」と書いたが、それは研究者として至福の瞬間というだけでなく、「民俗学者戸暁輝」誕生の瞬間でもあっただろう。

『愛と自由の生活世界への回帰』が完成した2008年、戸氏は休む間もなく新たな科研に着手した。それが氏の「3部作」の最後の著作となる『民間文学の存在論』の執筆、アンドレ・ヨレス『単純な形式』（邦訳名『メールヒェンの起源』）とマックス・リュティ『ヨーロッパの昔話』、そしてバウジンガー『科学技術のなかの民俗文化』の翻訳である。対外的に大きく門戸を開く中国民俗学にとって、ドイツ民俗学は遠いものではなかったが、バウジンガーについては、ドイツ民俗学史や英語圏の民俗学論著で触れられる重要人物として、思想の概要が知られる程度に留まっていた。その傾向に変化が見られたのは、1990年『科学技術のなかの民俗文化』英訳版の出版以降のことであり、特に2003年、ベン・アモスが英訳本に寄せたまえが

きが中国語に訳されると、同書の中国語版出版の機運は一気に高まった。だがその後、実現までさらに数年の歳月が費やされたのは、ひとえに本書の翻訳を担える人材が不足していたため、というほかない。そもそも中国民俗学には英語や日本語、ロシア語が堪能な者が多く、ドイツ語を扱える人間は絶対的に不足している。そのうえ、本書はドイツ語ができれば訳せるという類のものでもない。ドイツ語に通じ、かつバウジンガーの思想を理解する「理解者」の出現が、待たれたのである。今回和訳した訳者あとがきを見れば、戸氏がバウジンガーの良き理解者であること、少なくともそうありたいと誠実に尽力していることが分かるだろう。また、文中、戸氏は自身のドイツ語能力について謙遜しているが、氏が 2011 年刊行の『ヘーゲル全集』全 10 巻の 3 分の一を翻訳している事実からみても、その翻訳力は疑う余地がない。むしろ現在の中国民俗学には、本書ならびにリュティとヨレスの著書を訳せる翻訳者そして理解者は、戸氏以外にいないのではなかろうか。

『科学技術のなかの民俗文化』の中国語版が出版された 2014 年、同一の科研項目に列挙されていた『民間文学の存在論』も『民間文学の自由叙事』と改題して刊行された。残るリュティとヨレスの翻訳も、完成を間近に控えている。驚くほど速筆多作な戸氏だが、しかし、彼は特別要領がよいわけでも、抜きんでた才気に恵まれているわけでもない。上述の経歴からも分かるように、戸氏はただ純粋に、愚直なまでに努力し続ける「学問の人」にすぎない。戸氏は、学問が彼にとって「内なる召喚」であり「信仰」であり、彼が「この世界に生活し存在するかたち」だと言う。高丙中氏がディシプリンとしての民俗学を守ろうとしているのに対し、戸氏の追い求めるのはあくまで学問としての民俗学なのである。

あるいは、近い将来、戸氏は「民俗学者戸暁輝」という枠組みには収まりきらないかもしれない。だが、今この時代に戸氏という特異な、あまりに特異な民俗学者が存在することは、中国民俗学にとって大きな幸いだろう。